

「泳ぐこと」と「漕ぎ続けること」(前)

——「泳ぎ手たち」における「泳ぐこと」の意味——

山路 雅也

数多の作品において、黄金色の霞たなびく20年代アメリカ社会の繁栄と狂乱を見事な筆致で活写したF・スコット・フィッツジェラルド(F. Scott Fitzgerald)。彼のペン先から零れ落ちた伊達男やフラッパーは、或る時は贅を凝らしたパーティに漂うジャズの響きの如くに甘美で扇情的な愛に恍惚として身を任せ、また或る時はシャンパンの飛沫の如くに儂く切ない青春の夢に憧憬を抱きつつ、ジャズ・エイジという極彩色の綴れ織りを織り成してゆく。だがそんなフィッツジェラルド作品に親しんだ読者ならば、短編「泳ぎ手たち」(“The Swimmers,” 1929)が従来の彼の作品とは少々趣を異にすることに直ぐ様気付く筈だ。そこでは彼の自家薬籠中のものとも言うべきお馴染みの場面——20年代アメリカの華麗なる風俗を背景に、軽妙洒脱の語り口で綴られる色恋沙汰の顛末——は影を潜め、そのタイトルに示唆される通り、「泳ぐこと」の実践及び会得が主人公ヘンリー・マーストン(Henry Marston)に対し課せられてゆくのだ。

主人公に課せられる「泳ぐこと」。仮にそれが同時代作家のヘミングウェイ(Earnest Hemingway)の作品の中心に据えられるのならば、至極当然のこととして読者に受容されるに違いない。メキシコ湾流の巨大なマーリンと格闘し、トラウトの美しい銀鱗をワイオミングの清冽な流れの内に翻らせた彼のアウトドア志向、そして自らスティックに肉体を研磨し、拳闘家よろしく実際にグローブを嵌めリングへ登った彼のアスリートとしての側面を考えれば、このマッチョな作家の生み出す主人公が水泳というエクササイズに励んだとしても、それはさもありなんと言えよう。だが「泳ぎ手たち」を記したのは他でもない、遊蕩と享楽に浸りパーティに明け暮れた作家フィッツジェラルドなのである。

スティックな肉体の鍛練とはおよそ無縁のジャズ・エイジの寵児が描く「泳ぐこと」。本論ではこのフィッツジェラルドが捉える「泳ぐこと」の意味を、二人の「泳ぎ手たち」、ヘンリー並びに彼の「泳ぐこと」の指

南役のアメリカ娘から学びとりたい。するとその過程において「泳ぐこと」は、単なるエクササイズの域をたちまち越境するや、やがて『偉大なるギャツビー』(*The Great Gatsby*, 1925)(以下、『ギャツビー』と略す)より通徹するその真意を浮かび上がらせることになるのである。

1. アメリカ娘が指南する「泳ぐこと」—— 沖合に「浮く」こと、そして「汚れを落とす」こと——

家庭内に問題を抱える主人公が直面する人生の危機——。『夜はやさし』(*Tender is the Night*, 1934)を始め幾つかのフィッツジェラルド作品に見られるこのテーマを、「泳ぎ手たち」もまた踏襲している。同じテーマを扱う他の作品と比較してこの作品が異彩を放つのは、妻シュベット(Choupette)の不貞に起因する人生の危機に見舞われたヘンリーが先述の通り、そんな苦境の最中において「泳ぐこと」の実践及び会得に当たる点だ。そして彼の「泳ぐこと」の指南役として登場するのがアメリカ娘なのである。「泳ぐこと」の意味を探る為にまずはこの一人目の「泳ぎ手」、アメリカ娘に目を向けてみたい。

フランス滞在中にヘンリーは、シュベットの一回目の不貞から精神的打撃を受け病に臥せるも回復を図るべく、第一章において南仏はサン・ジャンの海岸に一家で赴くことになる。そこで彼は一人目の「泳ぎ手」，“a flying fish” (192) さながら軽やかに水を切るアメリカ娘と邂逅を遂げるのだ。そしてこの「泳ぎ手」が彼の目前で不覚にも溺水に見舞われると、自身は泳げぬにも拘らずその救助に携わった彼は、感謝の印として当地で彼女から「泳ぐこと」の指南を受けることになる。

「泳ぐこと」の指南は彼の二人の息子も交え第二章で開始されるが、それはやがて次の描写をもって終了となる。

... one day, Henry battled his way desperately to the *float* and drew himself up on it with his last breath.

‘That being settled,’ he told the girl, when he could speak, ‘I can leave St Jean tomorrow.’ (194; emphasis added)

一週間に及ぶ「泳ぐこと」の指南の末ヘンリーは、沖合の「浮き台

(float) への到達を遂に果たすことになる。引用に先立つ場面では、“The girl taught him a sort of crawl” (194) といった描写が確かに挟み込まれてはいるが、アメリカ娘の指南する「泳ぐこと」を単なる一泳法 (a sort of crawl) などと捉えてはならぬであろう。ヘンリーが沖合に浮かぶ「浮き台 (float)」に辿り着きそこに這い上がることで、即ち自らも沖合に「浮く」ことで、「泳ぐこと」の指南の終了を悟り、サン・ジャンを発つ決断を下すことを見落としてはなるまい。彼女がヘンリーに指南した「泳ぐこと」とは、岸辺を離れ沖合に「浮く」ことに他ならぬのだ。彼が到達したばかりのこの「浮き台 (float)」の上で後述する「泳ぐこと」の極意が彼女から披露されることも (195)、それから3年後この師弟が再会を遂げるのが他ならぬヴァージニアの海岸の沖合に浮かぶ「浮き台 (raft)」の上であることも、更にはその際に彼女が彼の息子たちに言及して、“And the boys — did the boys learn to *float*?” (202; emphasis added) という質問をヘンリーに投げ掛けていることも、それらは全て、「泳ぐこと」を通じて彼女が岸辺を離れ沖合に「浮く」ことをヘンリーに伝えようとしていたということを示唆するのである。

こうして弟子の「浮き台」への到達を見届けた少女は「泳ぐこと」の指南を締め括るに際し、上述の通り、まるで弟子に最後の公案を課すが如くその極意を披露することになる。

‘My brother and I [the American girl] are going to Antibes; there’s swimming there all through October. Then Florida,’

‘And swim?’ he [Henry] asked with some amusement.

‘Why, yes. We’ll swim.’

‘Why do you swim?’

‘*To get clean,*’ she answered surprisingly.

‘Clean from what?’

She frowned. ‘I don’t know why I said that. But it feels clean in the sea.’ (195; emphasis added)

この様にただ「泳ぐこと」だけの為に各地を転々とする少女を、ロバート・スクラー (Robert Sklar) は “a good swimmer who spends, so it seems, all her time swimming” (237) と評している。「泳ぐこと」の化身

——我々も彼女をそう見做すべきであろう。そんな彼女がヘンリーに問われるままに、「泳ぐこと」(岸辺を離れ沖合に「浮く」こと)の極意を「汚れを落とす為(to get clean)」と喝破してみせるのである。指南を受けて間もない新米の「泳ぎ手」ヘンリーは、“He had been about to ask her to explain a lot of things — to say what was clean and unclean...” (195)と描写される通りその意味を把握しかねるばかりだが、それは彼の内に或る変化を引き起こすことになる。

「泳ぐこと」の指南を受ける前の彼は、“a Virginian of the kind who are prouder of being Virginians than of being Americans.” (191)であることを自認し、そうした祖国アメリカへの希薄な帰属意識を際立たせるべく、“That mighty word printed across a continent was less to him than the memory of his grandfather...” (191)なる描写が施されていた筈である。だが毎朝の「泳ぐこと」の指南がその終りを迎え、少女が「泳ぐこと」の極意(to get clean)を明らかにした途端、彼はどうしたのか、“... he realized how much he was going to miss these mornings, without knowing whether it was the girl who interested him or *what she represented of his ever-new, ever-changing country.*” (195; emphasis added)と描かれるのだ。ヘンリーは「泳ぐこと」の化身の如き少女の内、その指南を受けるまでは見失っていた筈の祖国(ever-new, ever-changing country)を感知せざるを得ず、このことは取りも直さず、「泳ぐこと」がアメリカを「表わし(represent)」得ることの証左に他なるまい。スクラーがその極意に関して、“... this motive [to get clean] reveals Henry a larger national purpose.” (237)なる見解を示す所以もここにあるのである。

以上のことから、「泳ぐこと」が帯びるその思わぬ性質を見て取れるよう。フィッツジェランドの捉える「泳ぐこと」はスクラーの言葉を借りるならば、「国家的目標(national purpose)」なる性質を付与され、単なるエクササイズの域を越境していたのである。

一人前の「泳ぎ手」となるべくヘンリーは、こうした「国家的目標」なる性質を帯びた「泳ぐこと」を第二章結末部において実践すると、次章においてその会得を果たすことになる。そしてフィッツジェランドはその過程において、「泳ぐこと」の意味を明確にしてゆくのだ。

2. ヘンリーが実践会得する「泳ぐこと」——「想像飛翔」(“the exercise of the most transcendent imagination”)による半具像化された想像世界の幻出——

アメリカの「国家的目標」なる性質を帯びていた「泳ぐこと」。こうした「泳ぐこと」の指南を受けその習練に励むヘンリーを、アンドリュー・フック (Andrew Hook) は、“... Henry Marston goes on to try to define the distinctiveness of America...” (7) と評している。このフックの見解を援用するならば、我々はフィッツジェランドの捉える「泳ぐこと」の意味を臆気ながら掴むことが出来よう。「アメリカの特質を明らかにする試み (to try to define the distinctiveness of America)」, というのがそれである。

「アメリカの特質を明らかにする試み」——この一見判然としない「泳ぐこと」の意味を更に明確にする為に、我々は次に二人目の「泳ぎ手」ヘンリーに目を向けてみたい。この二人目の「泳ぎ手」による第二章結末部における「泳ぐこと」の実践及び次章におけるその会得の考察を通じ、「アメリカの特質」なるものが明らかとなる時、フィッツジェランドが捉える「泳ぐこと」の意味の把握も叶うのだ。

先述の通り、第二章においてヘンリーは「泳ぐこと」の指南を受けたが、それが終了したその晩に彼は祖国への帰国をやにわに決意する。それから一か月後には家族共々ヘンリーは帰国の途につくが、そんな彼が船上よりマンハッタンを遠望する次の引用が、上に述べた同章結末部における、彼の「泳ぐこと」の実践の場面である。

A month afterward, when the beautiful white island [Manhattan Island] floated toward them in the Narrows, Henry's throat grew constricted with the rest and he wanted to cry out to Choupette and all foreigners, “Now you see!” (197)

ヘンリーによる「泳ぐこと」の実践を引用の内に見て取ることは難くない筈だ。少女が指南した「泳ぐこと」とは、岸辺を離れ沖合に「浮く」ことであった。海原に「浮か」ぶ船上から祖国の地を遠望するヘンリーは、船

上の人となることで図らずも「泳ぎ手」と化していたのである。こうして彼が「泳ぐこと」を実践する時、先述の「アメリカの特質」なるもの的一端が明らかとなる。「泳ぎ手」に冲合より遠望されることで祖国の地 (the beautiful white island) は、“Americanism of his virtues” (Potts 65) とでも言うべき、思わず叫び声を上げたくなる程の、法悦にも似た強烈な感慨を彼の内に沸き起こすのだ。この二人目の「泳ぎ手」のヴィジョン (先述の通り「泳ぎ手」がそこへの帰属意識の希薄さを際立たせていた筈の現前の具体像たる祖国の地が、そんな彼の内に “Americanism of his virtues” なるものを喚起して止まぬ、なにものかへと変容を遂げてしまうこと)こそ、「泳ぐこと」により明かされる「アメリカの特質」の一端に他ならない。

こうして第二章結末部において、「アメリカの特質」なるものはその輪郭を示し始めたわけだが、それは第三章においてヘンリーが新米の「泳ぎ手」から一人前のそれへと成長を遂げ「泳ぐこと」を会得してみせるに及び、その具体像を示すことになる。

幸福な家庭を再建すべく帰国してから三年を経るも、シュペットはその不実を改めることなく、再び不貞を働くことになる。帰国後も相変わらず家庭内の問題に心を悩まされるヘンリーではあるが、それでも彼は少女に指南された「泳ぐこと」の習練を怠ることはなかった。その甲斐あって彼は、第三章において、遂にその会得を果たすことになる。

When difficulties became insurmountable, inevitable, Henry sought surcease in exercise. For three years, swimming had been a sort of a refuge, and he turned to it as one man to music or another to drink. There was a point when he would resolutely stop thinking and go to the Virginia coast for a week to wash his mind in the water. *Far out past the breakers he could survey the green-and-brown line of the Old Dominion with the pleasant impersonality of a porpoise. The burden of his wretched marriage fell away with buoyant tumble of his body among the swell,...* (201; emphasis added)

三年前、眩い陽光が降り注ぐ南仏の浜辺では一人目の「泳ぎ手」アメリ

カ娘が水を切り進みつつ、一尾の“flying fish”と化していた。ここでヘンリーも“a porpoise”の如く水中にその身を翻すことで、遂に「泳ぐこと」の会得を果たし、一人前の「泳ぎ手」に成長を遂げたことを示唆するのだ。そして彼は己が遂げた成長を顕示すべく、かつては摺み切れずにいた、少女の伝える「泳ぐこと」の極意（「汚れを落とす」こと）をこの引用において我が物として見せている。

ヴァージニアの沖合でうねりに身を委ねるとヘンリーは、砕け散る波の飛沫越しに“the green-and-brown line of the Old Dominion”を遠望し、「泳ぐこと」を実践する。ここで注目すべきは、現前の具体像（ヴァージニアの浜辺）を離れることで、それまでそこで営まれていた日常という現実（the burden of his wretched marriage）もまた「汚れを落とす」が如く波間に溶解消失し、「泳ぎ手」がその呪縛から解き放たれる点である。「泳ぎ手」は岸辺から離れ沖合に「浮く」ことにより、それを足下にすることで嵌められていた現実という足枷を外していたのだ。このことは、三年前に少女が説いていた「泳ぐこと」の極意に他ならず、また「泳ぐこと」が明かす「アメリカの特質」の更なる一端でもあるのだ。

こうしたヘンリーによる「泳ぐこと」の実践会得の内に、「泳ぐこと」の明かす「アメリカの特質」なるものが判然としよう。「アメリカの特質」とは「泳ぎ手」の“the exercise of the most transcendent imagination”（Stern 5）の賜物なのである。

既に見た通り「泳ぐこと」は、対象たる現前の具体像（岸辺）を決して足下にすることなく、それを見据えつつ沖合に「浮く」ことで成立していた筈だ。沖合に「浮く」こととは、「泳ぎ手」の岸辺への到達の回避、即ち「泳ぎ手」の「想像力（imagination）」が対象に完全なる具象化を遂げてしまうことの回避に他なるまい。こうして対象への完全なる具象化を確と回避された「泳ぎ手」の「想像力」は、“the most transcendent”なるものとして、その成育を促す糧となる現前の具体像を供されるのだ。現前の具体像なる対象を与えられているが故に絵空事に墮することもなければ、“the most transcendent”であるが故に、対象への完全なる具象化という現実の足枷を嵌められその“exercise”を阻止されることもない「泳ぎ手」の想像力。それは想像が限り無く現実に近付き強大な迫真性をもって迫るも、あくまでも想像のまま踏み止どまり得る、半具象化された想像世界とでも言うべき希有なヴィジョン（「アメリカの特質」）を幻出させると、

「泳ぎ手」の内に“Americanism of his virtues”を横溢させていたのだ。

こうした「アメリカ的特質」なるものの全容（「泳ぎ手」の内に“Americanism of his virtues”を喚起して止まぬ、半具象化された想像世界）を念頭に置きつつ、「泳ぐこと」の会得を通じ次の様にヘンリーの内に沸き起こった“Americanism of his virtues”に目を向けるならば、我々はフィッツジェラルドの捉える「泳ぐこと」の意味を把握することになろう。

In England property begot a strong place sense, but Americans, restless and with shallow roots, need fins and wings. *There was even a recurrent idea in America about an education that would leave out history and the past, that should be a sort of equipment for aerial adventure, weighed down by none of the stowaways of inheritance or tradition.* (201; emphasis added)

“history and the past”を「除外する (leave out)」こととは、即ち脈々たる既遂の事実（厳然たる現実）の足枷を取り払ってしまうことに他ならない。こうして“the stowaways of inheritance or tradition”といった既遂の事実の「重石を付けられる (weighed down)」ことなく——現実の足枷を嵌められることなく——、現前の具体像を足場に己が想像力を存分に天翔けさせる「想像飛翔 (aerial adventure)」を遂げるならば、換言すれば、現前の具体像を糧とするも、対象への具象化とは無縁の“the exercise of the most transcendent imagination”を履行するならば、それを遂げた者の内に“Americanism of his virtues”を横溢させて止まない、半具象化された想像世界の幻出（「泳ぐこと」という「国家的目標」の達成）が叶うのだ。そしてここでは、この「想像飛翔」と“education”が並置され、“There was even a recurrent idea in America about education…”なる一節が組み込まれることで、「想像飛翔」ならぬ「泳ぐこと」の「国家的目標」なる性質は一層顕著となり、アメリカにおけるその普遍性が強調されるのである。フィッツジェラルドの捉える「泳ぐこと」とは、「想像飛翔」を遂げることにより、即ち現前の具体像を糧に“the exercise of the most transcendent imagination”を履行することにより、半具象化された想像世界（「アメリカ的特質」）の幻出なる「国家的目標」を叶えることだったのである。

この様に「泳ぐこと」の意味が明らかになったわけだが、次に我々はこの短編の発表より四年の歳月を溯りたい。何故ならそうすることにより、我々は1925年に発表されたフィッツジェラルドの代表作『ギャツビー』の内に既に描かれていたもう一つの「泳ぐこと」を見出し、そこに短編「泳ぎ手たち」のそれに作者が託した真意を探る上での重要な手掛かりを得ることになるからである。

引用文献

- Fitzgerald, F. Scott. "The Swimmers." *Bits of Paradise by F. Scott and Zelda Fitzgerald*. Selected by Matthew J. Bruccoli with assistance of Scottie Fitzgerald Smith. London: Bodley Head, 1973.
- Hook, Andrew. *F. Scott Fitzgerald*. London: Edward Arnold, 1992.
- Sklar, Robert. *F. Scott Fitzgerald: The last Laocoön*. New York: Oxford University Press, 1967.
- Stern, Milton R. *Tender is the Night: The Broken Universe*. New York: Twayne Publishers, 1994.
- Potts, Stephen W. *The Price of Paradise: The Magazine Career of F. Scott Fitzgerald*. San Bernardino, California: The Borgo Press, 1993.